（三）大川・ぼなき石

町文化財　昭和五十五年七月指定

大川の真崎の旧国道一三五号線から海岸へ下る道（旧東浦路）の脇に、「ぼなき石」と呼ばれる直方体に切られた大きな石があります。この石は江戸城の石垣を築くために切り出され、石垣の角に積まれたので、角石と呼ばれている築城石です。

江戸幕府が江戸城を築き始めたのは、江戸時代初めの慶長九年（一六〇四年）からで、三代将軍の徳川家光の寛永十三年（一六三六年）まで続きました。そして、幕府はこの大きな事業を各地の大名に命じました。

大川村には、たくさんの大名が大勢の石工を連れて、築城石を切り出しに来ました。そのため、米のとぎ汁で川が白く濁ったといわれています。

この「ぼなき石」には「羽柴左衛門大夫」の文字と、二羽の雁が飛んでいる「丸に二つかりがね紋」が彫られています。羽柴左衛門大夫とは、安芸国広島城主（四九万八千石）の福島正則のことで、大川と北川の間の山中から築城石を切り出していました。

ところが、福島正則は幕府に許可なく城を改築した理由で、元和五年（一六一九年）に信濃国高井郡と越後国魚沼郡（四万五千石）に転封になり、寛永元年（一六二四年）に亡くなったので、広島城主の時に切り出されたものと思われます。

福島正則が大川から築城石を切り出したことは、当時の熊本城の城主である細川家の文書に書かれています。また、大川区有文書にも、何人かの大名から大川の村名主に「福島正則が切った石を欲しい。」とか、「江戸へ運ぶように。」との手紙が残されています。

この「ぼなき石」については、次のような話が伝えられています。

山中から切り出された石を港まで運んでいましたが、途中でびくとも動かなくなり、今の場所にそのまま残されました。

その後、いつの頃からか夜になると「ボワ

ー、ボワー。」という泣き声に似た声が聞こえてくるようになりました。村人が泣き声をたどっていくと、なんと動かなかった大きな石から泣き声が聞こえてくるではありませんか。

この石が夜になると「江戸へ行くのはいやだ、いやだ。」と泣きだすという話は、村人の間にすぐに広まりました。それから、この大きな石を「ぼなき石」というようになったとのことです。

その他にも、築城石を切り出すために遠く離れた広島から、大川の山中まで連れてこられ、過酷（かこく）な仕事をさせられていた石工たちが故郷（ここう）の家族を思い出して泣いたことを伝えているといわれています。

また、慶長五年（一六〇〇年）の関ヶ原の戦い以来、徳川家のために尽（つ）くしてきた福島正則が転封されたのを「ぼやいた」ために、「ぼやき石」が転じて「ぼなき石」と呼ばれるようになったともいわれています。